
私と本となりの物語

幸月さちこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と本となりの物語

【Nコード】

N0616X

【作者名】

幸月さちこ

【あらすじ】

私には誰も知らない、知られてはいけない不思議な能力がある。なんと、本に意識を持たせることができる能力だ。意識を持った本たちは人間のように姿を持ち人間のように話をする。つまり、化け猫ならぬ化け本が出来上がるのである。そんな化け本たちと少女の不思議な物語。

輝夜のホントな話1（前書き）

はじめまして。幸月かおる改め幸月さちこと申します。
拙い作品ですが、よろしくお願いします。

輝夜のホントな話1

私の名前は、つきよみかくや月読輝夜。

変わった名前だと言われているけど、これが本名なのだから仕様が無い。

私は、とある市内の中高一貫というエスカレーター式の高校に通う17歳。今の私には友達はいない。

いないというより、友人と呼べる人間がいなかった話で、なにもクラスで仲間はずれにもなっていないし、虐められてもいないし適当に付き合える人間はいる。

ただ、あまり人と関わり合いたくないだけだ。暇なときと休み時間、大概、図書室にいる。

私にとっては、本こそが友人・親友ともいえる存在だ。私には誰も知らない知られてはいけない、不思議な能力を持っている。

何故か、私の血には本に意識を持たせる事が出来るという能力があるのだ。

何故なのか、私の血に触れた本だけが意識を持つようになる。

私の血がほんのちよつと触れただけで本が、人間のように意識を持つ……

つまり、手っ取り早く言えば、化け猫ならぬ化け本が出来上がるのである。

こんな事が現実にあるなんて自分でも、未だに信じられない。
何なの！ 私の血！！——って感じ、今でもそう思っている。

兎も角、意識を持った本は人間のように姿を持ち、人間と同じように話もするし本の内容により、子供から老人・性別まで決まってくるらしい。

中にはまれに、性別の無いモノも出てくるけど……かといって、すべての本が意識を持ち、人間の姿を持てるわけでもないようだ。

ただ声だけのモノや全く反応のない、本もいるのだから……

なぜ意識を持つ本と、そうでは無い本とに分かれるのかは、私にはわからない。どうやら思い入れとか愛着とか、持ち主の念が籠っているような本が意識を持つようだ。

これって昔の人が言う、物の怪とか何とか言うモノなのだろうか？ はたまた、かわいく言うなら本の妖精？ いやいや、やっぱり、化け本と言すべきか？ そんなことは、どうでもいいけど……

なぜ自分にこんな能力があるのかは、未だに謎だ。

父方の親戚に霊能者らしい人がいたっていうことだけは、聞いたことがあるけれど、本当はどう何だろう!? ——って感じ……

ただこの能力が何時、覚醒したかは覚えている。2年前、私が高等部に進学する前に父が交通事故に遭った、あの日から……父はあの日以来、意識不明のまま今も入院している。

——この事については今は、まだ何も話したくはない……

で、今日も私は昼休みに弁当かつ込みながら、本とおしゃべりしている。

「今日も、図書室ヒマだねえ。お昼休みだつて言つのに誰も来てないし……」

「来ているのは、いつもお前だけ。つか、ここ飲み食い禁止だろ! だから、人気ないんだろうが」

「えーいいじゃない。図書委員長だもん」

「その、図書委員長が規則を破つてどーする!?!」

飲み食い禁止、おしゃべり禁止も破りやがってと、あきれ顔で私を睨んでいるのは私の大好きな海賊モノのライトノベルの本だ。

まさに、本の主人公のイメージにピッタリな姿をしていて、年頃は私と同じくらい。

背は高く、髪と眼の色が綺麗な青玉色サファイアいろの中性的な魅力を持った美少年の姿をしている。

名前はアズル。本の主人公、海賊王子と同じ名前だ。

何故か、本の主人公のワイルドなイメージよりも、几帳面でまじめな性格になっているのが不思議？ 何ですけど……

「まあ、いいじゃないですか。大体、昼休みの図書室は人気のないものです」

そう言って、苦笑しているのは私の愛用の漢和辞典である。もとは、父の物で使いやすいので、私が無断拝借している。

彼は透明感のある紫水晶色アメジストいろの長い髪と眼を持ち、落ち着いた感じの20代前半の青年の姿をしている。

名前はディック。私はディと呼んでいる。物語系ではない本の年齢は、発行年月で決まるみたい。いかにも日本男子って感じの涼しげな目元の超美形だ。

ちなみに、この二人？ は私の愛読書でもある。

この二人のほかに、今日は人の姿をした絵本と人気ミステリー小説の本がいる。絵本は5歳ぐらいの可愛い女の子の姿をし、ミステリー小説の本は30代ぐらいの男性の姿でどうしてか、あの眼鏡が素敵な某韓流スターに似ているなあ？ ——って姿をしている。でも、この男。何故か、銀縁眼鏡をかけた目つきがやたら鋭すぎるような？ 気がする……

彼らは、この学校の図書室の住人である。

「ヒマなほうがいいもん。カグヤちゃん、久しぶりに独り占めできてうれしいもん！」

絵本の主人公と同じ名前のメルちゃんが、うれしそうにすり寄ってきた。

彼女は『お菓子の国の妖精たち』という絵本のヒロインであり、どんな絵本かというと妖精見習いの女の子達が立派なお菓子の妖精になるべく奮闘するといった内容の物語で、イラストが可愛いことで大人にも人気がある。なんで、うちの高校の図書室に絵本があるのかは、取り敢えずおいといて本当に砂糖菓子のように、ふわふわとしたキャラメル色の髪と眼をしている美少女で、ほのかにメープル・シロップのような甘い香りがする。

「うーん、私もよ。メルちゃん」

本当に思わず頬を、すりすりしたくなるほどの可愛さだ。

「やれやれ、お前達はいつも騒がしいな」

上品なスーツをビシッと着こなした某韓流スターもどきの姿をした本が、銀縁眼鏡を押し上げながら上から目線で、見下すように溜息を継いだ。ちなみに、彼の髪と眼は灰色に青みが懸かった冷たい鋼色はがねいろをしている。

「そう、言っんなら、なんで、出てきたんだよ！ オッサン！！」

アズルが、くわっ！と目をむいて食ってかかる。アズルは彼が気に入らないのだ。

「失礼な、私はオッサンではない。ちゃんと織田おだという名前がある」

織田というのは人気作家の警察もののミステリー小説で映画になるとかで今、話題になっている人気シリーズの主人公だ。続編も次々と出ている。

テレビドラマ化もして私も大好きなイケメン人気俳優が演じているけど、俳優さんのほうが私の考える織田のイメージに近いといふべきか……

何故か、本の織田は超S系というか結構キツイ性格になっていて、しかもなんでものやさしい微笑みが素敵な某韓流スターに似た姿で、化けているんだあ！？——って思ってしまう。

なんで、コイツを人間化してしまったのか？ たまたま、返品されたコイツとその他の本をカートに乗せようとした時、紙で指を切ってしまったことが原因だ。

しかもコイツだけじゃなく、ほかの本にも私の血が付いてしまった……それで、この図書室には意識を持った本がいる。

「うえ〜ん、メル怖い……」

そのうちの1冊メルちゃんが、涙目で私にギュッと抱きついてきた。

「あ〜、大丈夫よ。メルちゃん。泣かないで、私がついているから」

「ほら、ガキも怖がっているだろうが……そもそもお前、何で出るんだよ？ いつもは、無視して出てこないくせに……」

けんか腰のアズルをディックが、やんわりと押さえる。

「まあまあ、織田さんも何か用があるから出て来たのではないですか？」

ディックが、穏やかな笑みを浮かべて問う。

「ああ、実はだな……」

織田がこぼつと、咳払いし銀縁眼鏡を押しやる。

「実はここ最近、この図書室で行方不明が出ているらしいのだ」

何でも、数日前から所在不明になっている本があるらしい。

「へ、村上先生が整理しているとかじゃないの？」

弁当箱を片づけながら、私は首をかしげた。村上先生は図書室の司書も兼ねている国語の先生で、織田によく似た姿をした30代の男の先生だ。気さくな人柄で学生達に、特に女子に人気がある。

こちらのほうが微笑みの貴公子的雰囲気を持っていて、女子に大

モテモテの先生だ。実は、こっちもひそかに憧れたりする。

うちの高校では以前は半年に一度、本の整理もかねて古くなった本を処分したり、新しい本に入れ替えたりすることもあった。が、ここ最近では、予算の問題とかで、今のところ新しい本を購入する予定もない為、古い本もよっぽど傷んでない限り処分する事はない。ただ、OB会からの寄付とかの本は受け入れているので、その為、絵本やミステリー小説があったりする。

「でも、本の処分とかするんだったら、こっちにも聞くはずだけど……村上先生からは、何も聞いてないよ」

「誰かが、勝手に持ち出したりしているんじゃないのか？」

ふあーっと、あくびをしながらアズルが興味なさそうに聞いてくる。

「それは、どういう本が行方不明になったのですか？」

アメジストいろ
紫水晶色の眼を細めて、ディックが穏やかに尋ねる。

「それが、どうもジャンルはバラバラなのだ。芥川龍之介の本だとか……今、人気の話題本だとか関連性が全く無いのだ。ともかく今

は6冊ほどが行方不明になっている。その中に、人形ひとがたを持つ奴が3冊いる」

織田は考え込むように腕を組み顎に軽く手を当てている。そんな姿も憎らしいほど様になっていて素敵だ。ただし、目つきが怖いのを除けばの話だけど……

「そんなに、化けた本が不明なの？ って言うか、6冊も！？ そう言えば、貸出したっていう記憶にも無いなあ……もし、人の姿を持てる本が3冊もいるのだったら、必ず私に声かけていくはずだ……」

借りに来るとすれば、放課後のほうである。昼休み中の図書室は人気なくても、村上先生が司書として居る放課後は大人気である。先生、目当ての女子が押し寄せてくるのだ。

それに、ちゃんと真面目に読みに来る生徒たちも放課後にやって来る。

そして、貸し出し記録を付けたりするのは、私だ。こう見えても記憶はいい方で図書室にある本は、置いてある場所もタイトルも作家名も含めて、すべて把握している。

これも不思議な能力のおかげである。勝手に意識を持った本が隣近所の人のように所在を教えてくれるので、返却された本を戻すのに便利なのだ。たまに、うるさいっ！ と、思う時もあるけど……

「3冊とも、もしかしてあの時に血がついた本？」

そう言えば織田のせいで……と過去を思い出し首をかしげた。

「そうだ、お前の不注意で私を含めて、血だらけにされた仲間だ」

「……………!？」

それは、違うだろ!! と思わず織田を睨む。

「血だらけには、していません! あの時カートに乗った本、棚に戻しやすいように整理して……たまたま、あんたに触れた時、カバーで指切っただけで……すぐに村上先生がティッシュで押さえてくれたじゃない!! あんたのは事故として仕方がないけど……」

ただ、村上先生……「大丈夫ですよ。ほかの本には付いてはいませんよ」と爽やかに笑いながら、私の血が付いたティッシュでカートに乗っていた本をザザッと拭いてしまい、ほんのチョットの血だったのにたちまち、織田を含めて11冊あった本のうち8冊が意識を持ってしまった。それ以来、図書室の化け本のおしゃべりに悩まされる羽目になる……

そのうちの1冊が学校で絵本なんか借りる人、居るんだと感心した、絵本のメルちゃんだ。可愛いメルちゃんと嫌味な織田を含めて計6冊は人の姿を持ち、もう1冊は植物図鑑なので声だけの存在であとのもう1冊は何だか微妙な姿で……なんで!? それなの!!!
! と言ってしまうような姿をしている。

そういえば、ここ最近はやけに静かだなあ——とは思っていたけど、そういうことか!? だけど意識を持つのは人の想念がこもった本だけのはず、何でこれだけの本が化けて……と今更、不思議に思い首を傾げていると

「織田さんたちは輝夜^{かぐや}さんの学校のOB会か、どなたかの寄付で来られたのですか?」

ディックが思案顔で訊ねてきた。

「ああ、そうだが……私は5冊セットで来た」

「メルは絵本の仲間3冊と、声だけの植物図鑑さんと一緒に来たよ」

「ああ……それで、元の持ち主の念が、まだ残っていたのね。じゃ残りの本もそうなんだあ」

私はようやく納得して頷いた。さすが、ディだね。疑問に感じた事をちゃんと聞いてくれた。普通、本屋さんや図書館などの公共的な所にいる本は、さまざまな人が触れるので、念が分散される。これは学校の図書室でも同じだ。そのため、よほど滅多な事がない限り、本に特別な念が籠るという事は無い。

また、持ち主の手から離れた本は、元の持ち主の念がまだ、残っていたとしても次第に薄れていくものだ。

「それじゃ、放っておけば、お前も消えていくってことが……早く消えてくれないかなあ……」

アズルが小声で、ぼそつと呟く。聞こえてしまった私は思わず、うんうんと頷いてしまった。

「聞こえているよ。失礼な奴だな、お前は……ともかく、6冊の本が不明なのだ。これは、間違いなく誘拐されたに違いない!!」

「……………!？」

織田の確信に満ちた声に、沈黙が落ちた……何かが、間違っているような気がする……

「いいえ、これは誘拐でも何でもありません」

ディックが、呆れたように溜息をついた。織田の鋭いまなざしがディックを刺す。

「いいですか、そもそも誘拐とは人をだまして、かどわかすことを言うのです。私たちは人ではありませんので誘拐されたとは言いません。あえて言うならば単なる無断借用された。と、いう表現が正しいかと思いますが……」

「そうだよね…本なのだから…黙って持っていたちゃいました！
テヘッ！？ で良いんだよね……」

「これだから、辞典の奴は頭が固くて困る。もっと、事件的に事を運ぼうとは思わんのか」

「どーしても、事件に持って行きたいんだねえ……お前って奴は」

さすが、ミステリー小説だけあるよ……とアズルが呆れ果てて肩をガックリ落としている。なんだか図書室全体に脱力感が漂っているような、昼休みになってしまった……

兎も角、何とか放課後までに何か情報がほしいので織田に聞込み捜査？ をお願いし、昼休みも終わりになり午後の授業が始まる前に、私は図書室を後にした。

輝夜のホントな話2

午後の授業を終え、再び図書室へ向かう途中、すれ違う人に変に思われないように俯いて小声で手元の本達に話しかける。

「ねえ、二人ともどう思う？ 織田の言う事。なんか事件になりそう？」

手に持っている本二人？ に聞いてみると漢和辞典のディックが声だけで静かに答えた。

「まだ、何ともいえないですね。不明というだけでは……どういう状況で不明なのが分ければ、良いのですが」

「あれだろ、つい面白くて誰かが、すっかり持っていちまったとかじゃないのか」

人気ライトノベルのアズルが、それに違いないと断言する。

「うーん、こちらとしては別に本が無くてもどうでもいいし、かといって本当に不明なら管理がなって無いって怒られそう。まあ、後は織田の聞込み次第だね」

村上先生にさりげなく聞き出してみるか……でも、どうやって聞き出そうかなあ？ と、あれこれ思案しているうちに図書室に着いた。

昼休みと違い今日も放課後は大人気だ。「キャー、ギャー」と騒がしい女子ばかりで、在る一点に群がっている。

真面目に本を読んでいる生徒達が、隅の方で迷惑そうに眉を顰^{ひそ}めている有様だ。

「私語禁止がなつとらん！！！」

アズルが憤慨して怒りだす。誰も聞こえていないのが残念だ……アズルは何故か規則を守るのが大好きみたい。一体、化け本の性格はどうやって決まるのだろうか？ いつも不思議に思っているのだけど……

いや、今はそんなことよりも、と目の前の女子の塊を見つめ、どうやってあそこまで辿り着こうか……毎回毎回、悩みの種なのよ。これがと色々、思案している内に群がっている女子の中心より手が伸びた。

「ああ、月読^{つきよみ}さん、ちょうど良い処に来てくれました」

眼鏡の似合う某韓流スター似の爽やかな笑顔で、村上先生が呼び掛けて来た。たちまち、物凄い視線が一斉にグサグサッと刺さって来るのが感じられ、本当に心臓に悪い。

「……え、はい—— 何でしょうか?……」

「わたしのかわりに、このリストに載っている本の情報をパソコンに打ち込んでくれませんか? 今、呼び出しを受けて職員室に戻らなくてはいけないので……お願いできますか?」

取り巻きの女子達から「え、っ」という不満の声が図書室に響き、皆さん静かにしなさいと注意しながら村上先生が立ち上がって手にしたリストを渡してきた。

「出来る範囲で構いませんので、お願いしますね」

「なるべく早く戻るようにしますから」と、爽やかな笑顔と共に図書室から出て行き、その後を取り巻きの女子達が、そろそろと金魚のフンのごとく付いて行く。

やっと、静かになった図書室にほっとしていると、お次は別の意味で頭を悩ます絶対零度の声が頭上から響いてきた。

「ようやく、静かになったな」

織田が銀縁眼鏡を押しやりながら、何処からとも無く現れた。随分とこ機嫌斜めなようで……ディックとアズルも人の姿で現れる。

他の人には見えないので、誰も気づかない。あたりまえだけど……

「で、何か分かりましたか？ 織田さん」

ディックがなだめる様に織田に尋ねる。アズルはムツとした顔で黙り込んだままだ。

「今のところはまだ、わからん。ただ、どの本が誘拐されたかは分かったが……」

織田はどこまでも誘拐説にこだわっている。アズルは呆れかえって溜息ばかりつき、ディックは苦笑い。

「まだ、言うか……」

アズルのぼやきを無視して、織田が誘拐？ された本のタイトルを挙げる。

「芥川龍之介の本4冊、歴史物1冊。つまり、坊主と織田信長と明智光秀。そして、もう1冊、わたしの鶴さんが誘拐されたのだ！」

「はい？ 鶴さんが……」

それでやたら、誘拐だのと言ひ募つてたのか…… 鶴さんは小説の中の織田の相棒である。そして織田の言うところの血だらけ仲間のうちの一人でもある。

ちなみに、血だらけ仲間のうち、人形ひとがたを持つた化け本は、ミステリー小説の織田と鶴さん、絵本のメルちゃん、歴史小説の織田信長と何故か明智光秀。それとはまた、別物の歴史小説の春日局と芥川龍之介全集の『鼻』の大きな鼻のお坊さん。微妙な姿をしているのは『河童』の眼鏡を掛けた河童だ。あと、声だけの植物図鑑となる。

輝夜のホントな話3

化けた本のうち、歴史小説の織田信長と明智光秀は、何故かおネエ言葉でしゃべるホモっぽい二人だった。黙っていればいかにも戦国武将という、ガタイお姿のおじさんである。なのに、お互いに「ノブちゃん」「みっちゃん」と呼び合い、いつもイチャイチャベタベタしている。

たしか、このお二人、敵同士になるのでは、それに1冊で二人も化けるなんて……いったい、この本の前の持ち主のどんな念が籠ってこうなってしまったのだろうか？ 未だに謎である。

戦国武将は美少年愛好家が多かったらしい！？ というホントかどうか私には解らない説を裏付ける様にアズルは、この二人にやたら気に入られて、迷惑していたのにも記憶に新しい。

「アズルちゃん。今日も、可愛いわねえ。うふっ」

今にも、ハートマークが飛び交うようなセリフを平然と吐いたのは、彼の織田信長である。アズルを見るたびに投げキッスをし、その都度、アズルは身かわしては逃げ回っていた……

「アズルちゃん。わたしたちと一緒に遊びましょ。可愛がってあげる」

聞いている方がゾゾツと背筋が凍るような甘ったるい、こわもてダミ声で話しかけるのは明智光秀。こちらはウインク攻撃だった。強面の顔で、ウインクされても変質者みたいでキモイ。しかも一重の細い目なのでウインクもしているのか、どうかも分からないのだけど……

…当然ながらアズルは必死で身をかわす。

かわし切れなくて、身の危険を感じるとアズルは本に戻り、漢和辞典とラノベの2冊を常に持ち歩けるように手作りした私のポーチの中に隠れる。ちなみに此のポーチは肩掛け出来る様に作っているので、常に二人？ を身近に置く事が出来る。

アズルが隠れると、ディックの方に矛先が向くのかなあ？と思っ
てみると、彼らはディックを何故か恐れているらしく、絶対に
ちよっかいは出さない。実は彼らが化け出た時、最初に目を付けら
れたのはディックの方である。

だが、ディックが彼らに二言三言、何やら話すと、何故か彼らは
一応に真っ青になって引いていた……いったい、何を話したのだろ
う？ と不思議に思いディックに、「あの二人に何を話したの？」
って聞いてみたことがある。すると――

「ふふふ、内緒ですよ。輝夜^{かぐや}さんは何も知らない方がいいですよ」

って、鮮やかなやさしい笑みを浮かべていた……でも何だか、
妙に背筋が寒くなってしまったのを覚えていて。で、今は代わりに
アズルが、その被害をこうむる哀れな犠牲者に為ってしまっていた。

もう、1冊の歴史小説の主人公の春日局は大姉御でおしゃべりな
おばさんだ。このお局様は、超美形のディックとアズルが大のお気
に入りみたいで、二人を見るたびに絡んでいる。

ディックはお局様の気配を感じると、然りげ無く姿を消したりし
て上手に避けていたけど、アズルだけ要領が悪いのか、避けるのが
下手なのか、信長と光秀から逃げ回っているうちに、いつの間にか

お局様に取っ捕まえられているという有様で、今度はお局様のおしやべりと愚痴を、一方的に聞かされる哀れな犠牲者に為り下がってしまう。

うーん。どうも、アズルにとってはこの図書室は鬼門みたい。

「ねえ、聞いてよ。あのモンスターペアレンスたら、子供の教育はこうするべきだ！ うちの教え方は、古いだの文句ばかり！！こっちは、最新の英才教育を教えているってえのにつ！！！」

お局様の、声が大きいので愚痴がデスクにまで聞こえる。図書室に居る、ほかの人間には聞こえないけれど……ところで、お局様が「あのモンスターペアレンス」呼ばわりされている方でもしかして、あの方の事だね。たしか、徳川家の二代目将軍の奥さんで、大河ドラマの主人公の事だね。

……
「というか「モンスターペアレンス」って言葉、知って要るんだ……と、貸出し受付をしながら妙に感心してしまった。

それに対して、お局様にがっちり捕まったアズルがうんざりした顔で、当たり障りのない事を言う。すると、この後に起こった、とんでもない恐怖の場面を私は目撃してしまった。

被害者は、もちろんアズル……

「母親、なんだから、子供の為を思って—— うわあっ!？」

「おるああ！ どっちの肩を、持つねん！！ ああっ！！！」

反論しようものなら、巻き舌の関西弁で恫喝^{どっかつ}。海賊王子アズルが

主人公の人気ライトノベル小説に、出てくる悪役も真っ青の凶悪化け本ぶりだ。

しかも鬼のような、ものすごい目つきで睨まれてしまい、まるで蛇に見込まれたカエル状態に陥ってしまっている。あー もう、なんとも情けない状態に…… こうなったら後は、もう何も言わず、ただひたすら黙って、お局様が話し疲れるのを待つしかない。

さすがに、気の毒になって、ディックに

「ディ……アズル、助けないの……？」

「はい。彼が犠牲に為る事で周りの人が助かるのですから、助けなくても好いのです。アズルには、自己犠牲の精神を貫いてもらいます」

「……ディって、意外と鬼畜だね……」

「いえいえ、織田さんほどでは在りませんよ」

「……………」

織田も黒いけど……ディックも……もしかして黒い……？

アメジストいろ

紫水晶色の美しい眼を煌めかせて、にっこりと微笑む姿はまさにこの世の者とは思えぬほどに美しい。でも何故か、寒気がするんだけど……気のせいかな？

実際、ディックの言うとおりアズルが犠牲になる度に、こちらとしては非常に助かっているのは事実で、結局、お局様に捕まったアズルの背中に向けて、心の中で詫び手を合わせるしかない、無力な

私だった。（ごめん。アズル……）

さらにお局様のお気に入り、村上先生にも当てはまりアズルに飽きると、村上先生の背中に背後霊？ のごとくベッタリと、くっ付き取り巻きの女の子達を例の巻き舌関西弁で、わめき蹴散らしていた。

「この、わてに、対抗するには百年早いわ！！ 乳臭いガキどもは、ひっこんどりなっ！！！」

お局様の恐ろしい恨み声？ は、残念ながら女の子達には届かないけど……聞こえてしまう、こちらとしてはもう「恐ろしい」の一言だ。アズルと一緒に真っ青になって、取り巻きの女の子達に爽やかに笑いかける村上先生と鬼の形相の背後霊？ のお局様ペアを見つめていた事もある。

その他の化け本、文豪の芥川龍之介全集のうち人形ひとがたになった長い鼻！？ のお坊さんこと内供ないぐさんは、自分の鼻コンプレックスの愚痴ばかり聞かされ、眼鏡を掛けた河童のお医者さんチャック先生は、何故か話が微妙に通じない。

植物図鑑はこちらから話しかけない限り無言だし、メルちゃんひとがたは、可愛いけど話が限りなく飛んでしまう。織田に至っては論外。人形を持った本のうち一番まともに話が通じるのは、鶴さんだけだと思う。

鶴さんは50代ぐらいの、やや小太りな中肉中背のオジサンで穏やかなやさしい笑顔がトレードマークの叩き上げのベテラン刑事であり、小説の中での織田警部とのコンビで数々の難事件を解決する様は、まさにシャーロックホームズのワトソンの存在だ。織田と

共に人気を二分にするほどファンも多い人気キャラでもある。

そんな、まともな人格者の鶴さん、可愛いメルちゃん、声だけ植物図鑑の無害な3人は、別に居ても構わないけど誘拐された？ 仲間を含めて少なくとも8人？ の内、害ある6人？ は、このまま永遠に消えてしまつて、いい本であると思う。ていうか、この6冊は早く念が抜けて、ただの本に戻ってほしい！ と、切に願っている。

「他の3人は、別に良いけど、鶴さんが不明なのは、ちょっと気になるね」

本当に鶴さんは、織田の相棒には勿体ないほどの立派な人格者である。化け本なのが惜しいと思つてしまうほどに…… デイックと同じように、変質者？ だらけの本から常に私を守ってくれていた。

「こら、信長さん、光秀さん。それはセクハラというものですよ。女の子に絡んではいけません」

あの、恐ろしい春日局に絡まれた時には、デイックよりも先に助けてくれた。アズルは全く役に立たなかったけど……（逆に、鶴さんに生贄としてお局様に引き渡されていた……）

「春日さん、それは立派な脅迫に為ります。言葉使いには気をつけましょう」

穏やかでいながらガンとした態度で戒めてくれ、無敵のお局様も結局のところ、すごすごと引き下がるしかなかったほどの。（生贄アズルを引きずって……）

それに返却された本を元の棚に戻す時、刑事らしく、すべての本の所在を調べ挙げたのか、この本はあそこの棚に住んでいるとか、これは、その棚だとか、まるで本が隣近所に住んでいるかのよう
に、所在地を教えてくださいする。おかげ様でこの図書室の本の置き場所は、すべて記憶してしまった。（鶴さん。感謝しています）

ひとがたか
人形化した本は、ディックとアズルの2人？ を含め、この図書室の本8人？ と合わせて10人？ しか居ないけど、役に立っている本はディックとアズル（役に立っているのか分からないけど）。それ以外は、本当に鶴さんしか見当たらない。この事実からも次からは、絶対に血は流さないように、気を付けねばと切に思っています。今も……

「……はあ……」

誤って図書室の本を人形化ひとがたかしてしまったという、血だらけ事件の最初の頃の様々な出来事を思い出しながら、溜息を付き、織田の誘拐説をいったん無視して、村上先生に頼まれていたリストをパソコンに打ち込むべくデスクに向かう。

「え……と……兎も角、鶴さんの事は、一先ず置いて頼まれていたのを先に片づけなくちゃ」

パソコンの画面を見つめ、村上先生が途中まで打ち込んでいた箇所と、手元のリストを見比べて、何処から再開するべきかを確認をする。

「ん……と、此処まで、打ち込んであるから……ここからだね」

しばらく、パソコンにリストの内容を黙々と打ち込んでいるうち

に、ふと気が付いた。この、リストの内容に……

「……あれ？ このリストって、もしかして……」

捲られて、2ページ目になっていたリストの最初のページを慌てて確認する。リストは4枚あり、1ページ目と2ページ目の途中までは、村上先生が打ち込んでいた為、1ページ目が捲られた状態で渡されたのだ。1ページ目には、リストのファイル名が書かれていた。

「ああ、やっぱり。そうなんだ……」

デスクの向こう側の窓際で、アズルと口喧嘩している織田に声を掛ける。

「織田さん、事件は解決しましたよ」

「ん、それは、どういう意味だ」

「このリスト、文化祭にバザーに出す予定の本のリストなの」

「バザー……？」

そうなのだ。私が通う、この高校では文化祭に福祉活動の為の募金集めのバザーをする事が伝統となっている。集まった募金は、必要な所に寄付される事になり、今年は、震災義援金として被災地に寄付する事が決定している。

「あのね、生徒会主催で文化祭の時に、慈善市みたいなものをやるの。手芸の得意な子は手作りの小物を出品するとか、新品同然の不

用品とか、生徒から集めて百円から千円までの価格で、参加者に買って貰うの。今年は震災義援金として、寄付する事が決まっているから総力を挙げて、取り組んでいるみたいだけど」

手元のリストをもう一度、１ページ目から最後のページまで、ざっと見とおす。

「どうやら、今年は本も出品する事が決まったみたいだね」

そう、その中に化け本も含まれていたのである。

輝夜のホントな話 4

「お前、図書委員長の癖に何にも、知らなかったのか？」

織田の問いに、頷いた。確かに、何も知らされていない。でも、もしかしてと思い。

「もし、そうだとしたら、たぶん、1週間前の生徒会役員会の時に決まったとしたら……」

その時、デスクの後ろの方から、ガチャツと物音がし、ドアが開く音がした。ん、何だろうと思ひ振り向くと、物入れになっている書庫室から人が出て来た。その人物は、輝夜かぐやを見た途端、素っ頓狂な声で聞いてきた。

「あれ——、月読つきよみ、来てたん。今日、病院、行かなくて良いのか？」

同じ図書委員で、隣のクラスの倉木君だ。彼は、こちらの事情を知っている。「うん、落ち着いたから、もう大丈夫」と答えている傍らで、彼を見知っている、ディックとアズルも挨拶をしてくる。

倉木くんには、見えないのだけど……

「ところで、村上先生は……」と、聞いてくる彼に

「職員室に、呼ばれて行ったよ。それより、倉木君。このリストの事、なんだけど……これ、文化祭の時に、バザーに出す予定の図書の本だよな？」

「予定つていうか、もう、決定しちゃった本だよ。生徒会顧問の村上先生が、急に本のリサイクルバザーを提案してさ。それに最近、文庫本ばかり増えているし、おまけにダブっているだろ」

確かに、このリストに載っている本の、ほとんどが文庫本で、同じものがすでに、この図書室にもある。その為、正式に図書の本として入れる事は無く、これらの本はデスク近くの分類なしの本棚に納められている。化け本のすべては、此処に入っていた。

「こっちは、何も聞かされていなくて……」

「ああ、お前、この間の生徒会役員会、欠席していたよな。何だ、まだ、村上から聞いて無かったのか…… 先生らしいや、うん」

腕組して、うんうんと頷いている。たしかに、村上先生、ちょっと抜けている所がある。

「震災義援金に決まっただろ。だから、生徒会執行部でも、もつと力、入れようってことで村上先生の提案に賛成したんだ…… さらに全生徒にも呼び掛けて、いらない本を集めることで…… ついでに図書室のお荷物になっている本も処分しようと言う事で決まったの」

お…… お荷物、だったの。あいつら…… いや、言われて見れば確かに……

「あと、残りの本。書庫室に、運びこめばOKさ。えーっと、芥川のが、あと3冊と『春日局』と絵本4冊と、植物図鑑だな…… それにしても、何処へ行ったのだろ、この本？ ずっと探しているのだけど…… 月読、これ知らない？」

手にしていた、リストのコピーを見ながら、倉木君は「これ、何
だけど……」と、言ってコピーに載っている本の題名を指さした。
それは、その題名もズバリ『春日局』。私は思わず首をブンブン振
ってしまふ。

「し…… 知らないけど……」

「これだけ、どうしても見つからないんだよね。誰か借りているの
か調べてみたけど記録にも無いし…… やっぱ、何処か其処ら辺
に置きっぱなしになっているのかな？」

「マナーの悪い奴もいるものだよ」と、ぶつくさ言いながら図書室
の本棚の所へ、倉木君は行ってしまった。

「……………」

（お局様、最近やけに静かだと思っていたら、もしかして隠れてい
る……のか！？ そ、それにしても、これって……）

なんと、化け本のほとんどが、お荷物行。つまりバザー出品物と
して正式に決定していた。これは、喜ぶべきなのか…… アズルは、
と見るとホッと救われたような顔をしている。ディックは苦笑し、
織田は、と見ると、見なかった方がいい顔をしていた……

眼鏡の素敵な某韓流スター似の顔が想像もつかないほどの顔をし
ている…… 本物の。様なら、絶対にしない顔だと心の中で思った。
（き、きよわいつ……）

「それより、確かめようぜ」

アズルが嬉々として、デスクの後ろにある書庫室へ覗きこみに行

った。

「……そ、そうだね」

気を取り直して、パソコンの前を離れ、書庫室に入る。書庫室は、それほど広くない。大体3畳か4畳ぐらいの広さで、メインの本棚に出し切れないそれでも必要な本だとか、傷んでいるけど処分できない絶版の名著とされている本やら、図書カードの予備とか本の予備目録などが置いている。その他、奥の方には図書室には直接、関係のないと思われるウサギとパンダの着ぐるみも何故か置いてあった。

その書庫室の床に段ボール箱が、置いてあり、その中に、例のリストに載っていた本。つまり、お荷物行きに決定した本が収まっていた。

アズルが箱を覗き込んだ途端、織田信長と明智光秀が出て来た。思わず、仰け反ったアズルに縋り付いて泣き叫ぶ。

「「いや——ん——っ！ アズルちゃあ——ん！！ あたし達、売られちゃうのよ——っ！！！！」」

「知るか！ 離せ——！！」

美少年アズルと、ゴツいオカマな？ 中年戦国武将2名が擦った揉んだしているのを横目で見ながら、織田とディックと共に箱の中を覗きこむ。すると、誘拐されたはずの鼻のお坊さんがふらりと現れ、相変らず自分の鼻のことでブツクサ言いながら、幽霊みたいにひっそりと隅の方へ移動していった。その姿を見たディックが

ものだわと思わず見てしまふ。と、何処からともなく低い、地を這うような氷の音が書庫室中に響く。

「静かにしろ……」

一気に狭い書庫室の中が氷点下までに気温が下がった！？　と思つた途端、エロ三人組の動きがピタツと止まつた。私も何だけど……恐る恐る、ちらつと振り向くと織田の端正な顔に表情が無い。もともと、無表情の顔が更に氷の仮面を被つたみたいになっている。まるで氷地獄からの使者みたい。

思わず、隣にいたディックの後ろに隠れる。

「……ねえ、ディ。織田さん、どうしちゃつたの？」

「此処には、居なかつたのですよ。鶴さんの本だけが……」

「そう言えば、リストにも織田さんの本だけ載つて無かつたね。それも、5冊全部除外されていたよ。不思議に思つたけど……それより、織田さん。どうして、今まで気付かなかつたの？　仲間が不明になつた事とかバザーの事も……　織田さんの方が、殆ど1日中、図書室にいますでしょ？」

彼は図書室の住人なのだから、私よりも直接、現場にいる筈。それなのに何故、彼は仲間が今の今まで行方不明になつた事も、バザーに出品される事も知らなかつたのか？　彼なら誰よりも真つ先に気づくはずである。

それなのに、彼は今日、初めて知つたような口ぶりだつた。ディックの後ろに隠れながら、村上先生に渡されたリストを見た時に疑問に思つた事を思い切つて織田に投げ掛ける。

織田は暫く、私の質問に答えようとはしなかった。だが、ディックに視線で促されたのか洩々と言った感じで

「……わたしは、昨日、戻ったのだ」

「へっ！？ 借りられていたの？」

思わずディツクの後ろから顔だけ出して、織田を見る。彼は氷の様な顔を微かに歪めて頷き、その事実を肯定した。

「で、で、でも、記録には無かったよ？」

「そりゃ、正式な貸出では無かったからな」

「」「」「」……！?」「」

()() あんたが無断借用されているじゃん!!!()()

))

その場にいた全員が同じことを思った……

輝夜のホントな話5

全員が啞然としてしまった中で真つ先に氣を取り戻した、ディックが織田に訊ねる。

「何時、持ち出されたのです？ 無断で拝借した人は知っている人物だったのですか？」

「知らん。ニキビだらけのガキ二人組だ。一方の奴に3日間、もう一人の奴には1週間ほど拘束された。さすがに、いい加減に戻りたくなったので、最後の方の奴の枕元で毎晩、図書室に戻せと脅しをかけ続けた。三日三晩、脅し続けて、やっと昨日、戻った」

三日三晩、枕元に、ですか…… それって、脅しじゃなくって呪っているというべきだよな。無断借用する人も悪いけど、きつと、慌てて戻しに来たのだろくなあ。織田に呪われてしまった生徒には思わず同情してしまう。

何とも気まずい状況の中、ギャンギャン喚く声と共に倉木君が書庫室に入ってきた。

「やっと、見付だぜ。月読^{つきよみ}、この本」

振りかえって、ギョツとした。倉木君が凄惨な状態になっている。お局様が倉木君の背中にへばりついて、彼の頭をボカボカと殴っているのだった。その後ろを、メルちゃんと河童がプリプリ怒りながら付いてきていた。

「ええい！ 離さんか——っ！！ この、わてに、手を掛けると

はい度胸じゃ——っ、貴様、命が惜しくは無いのか——っ！！！！
このっ、このっ、こうしてやる！！　こうしてやる！！！！」

しっちゃんかめっちゃんか、倉木君の頭を殴りつけている。けど、当の本人は何とも無い様で逆に頭をポリポリ掻きながら、小脇に抱えた数冊の本を手にしていた。お局様の本と絵本全部、そして残りの芥川龍之介全集と植物図鑑だ。どうやら、これで織田と鶴さんを覗いて、お荷物行きの化け本がすべて揃ったことになる。

いまだに、倉木君の頭をポリポリしている、お局様を見上げながら

「ねえ、ねえ、この本。何処にあつたの？」

と、『春日局』の本のことを聞いてみた。

「ん、それがね。人気の無い科学の本棚の所に、置いてあつた。しかも、一番上の棚に隠されているようにさ。だれが、あんな所に放り込んだんだろう？　全くもう、随分捜しまくったよ」

「……どうやって、見つけたの？」

「……ん、何と言ったらいいのか。偶然、見つけたと言った方がいいのかなあ？　ともかく、ほかの本だけ先に持って行こうとしたのだけど……　何故か、本がボトボト手から落ちてきちゃってさ。しっちゃん持ったつもりなのに、どうしてか、一冊ずつ落ちて来るし……　それを、いちいち拾い上げているうちに、科学の本棚にぶつかっちゃって、思わず見上げたら、この本があつたというわけ」

頭をポリポリ掻きながら、「不思議だよなあ？　なんか、導かれたようだった」と首をかしげていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

……やっぱり、お局様だけ、知っていたのだ。私が放課後の図書業務を暫く休んでいたから、アズルもディックも居ないしその分、村上先生にベツタリとくっ付いていたのだろう。その時に、何か気付いたのかも知れない。もしかしてバザーに出す処分本のリスト作成をしているのを覗き込んで気付いたのかも。それで、そんな所に隠れていたのね……

しかも、自分だけ何とか逃れようとしちゃって、それに気付いたメルちゃんと図鑑と河童が、そうはさせまいと倉木君に隠れ場所、教えちゃったんだ。

案の定、メルちゃんと図鑑と河童がお局様に向かって言い争い始めた。

「おばちゃん！ ずるいつ！！ 売られる事、今まで黙ってた！！

」！

「……………ずるい……………」

「そうですぞ！ 仲間に内緒にして自分だけ逃れようとしたって、そうは、させませんぞ！！」

珍しく、河童がまともな言葉をしゃべっている。

「うるさいわ！ まさか村上が、わてを裏切るとは思わなかったわ！！ 呪ってくれるわ！！！」

村上先生、本当にとんでもない本に呪われちゃって……それも、今日までみただけ。四人がギャンギャン、喚いているのを無言で見詰める織田の冷たい横顔を見て、倉木君に訊ねてみた。

「ねえ、倉木君。織田警部シリーズの本、あるよね。あの本はバザー出品には、入っていないね？ 何か知っている？」

「ああ、あの本ね。村上先生、お気に入りの本だろ。あの本なら、村上先生がすでにシリーズで買い上げちゃったけど……」

「はいっ！？ どういう事！」

「いやあ、先日の委員会の時に、文化祭のバザーについて話し合っていたのだけど、図書室の本がダブって困っているの、バザーやるついでに本のリサイクルバザーも提案したいという話になった。その時に村上先生、ダブって困っているけど、気に入った本だからって、その場で1万円、寄付したの」

「ええっ、文化祭のバザーやる前に、もうすでに買い上げたの？」

「ん、そうなの。あと1冊が不明のが、残念だとか言って、生徒会会長の目の前で寄付箱にお金、入れていたよなあ……」

不明の1冊って、無断借用された織田の事だ。と、ともかく鶴さんの居場所が分かった。村上先生の所に居るのだ。あとで、先生に確認しなくては……

お局様を背負った倉木君が持っている本を段ボール箱に詰めている。お局様とメルちゃんと植物図鑑、そしてお坊さんと河童が悲鳴を上げた。

つられて、信長と光秀も泣き叫び始め、司書室の中は阿鼻叫喚の大絶叫の場と化す。

「や——めろって、言っているのが、分からんのかあ——っ！
わては、嫌じゃ——っ！！」

「カグヤちゃあ——ん！」

「……む、む、む」

「鼻が……嫌だ」

「○●▲——！！」

「「いやあ——ん！ アズルちゃあ——ん、あたし達もイヤア——！！」」

「俺まで、巻き添えにするな——っ！ 離せ——っ！！」

巻き添えのアズルまで叫び始め、何ともすごい有様の中で倉木君は淡々と処分する本を確認しながら、段ボール箱に詰め直している。私は、あまりの五月蠅さに堪らなくなつて司書室から脱出した。

アズルが「俺を見捨てる気かあ」と喚いているけど、あとで回収するとして。

「はあっ、やれやれだね。ディ」

「はい、でも、これで事件は解決ですね。そうでは有りませんか、織田さん」

「……まだ、鶴さんが村上の所に居るとは確認していないぞ」

織田が氷の様な目でディックを睨む。ディックはにこやかに平然と織田の氷の視線を受け止めている。この二人も別の意味で怖いのかも知れない。私はゾツとした。

「……うゝっ、見なかった事にしよう。そ、そうだ。リストの続き

を入力しなくちゃ」

あとは、ひたすら残りの情報をパソコンに入力する。3ページの終わりまで入力して、あと残り1ページだけになった時、ガチャリと音がした。振り向くと倉木君が段ボール箱を抱えて、出て来た。デスクに段ボール箱を置き、箱の上に載せている本を差し出した。

「月読、これ、お前の本だろ。落ちていたよ。もう少しで間違えて入れる、ところだったぜ。」

置き去りにしたアズルの本だ。あとで、アズルにはちゃんと謝っておこう。

「ありがとう、倉木君。それより、その本。何処に持って行くの」

「生徒会会議室に集めることになっているよ。月読、次の委員会は出られる？」

「ん、もう、落ち着いたから大丈夫だよ。ごめんね、倉木君。図書委員長の代理、急なのに代わってもらってありがとう」

「うん、良いの。おふくろさん、大変だったね。もう、大丈夫なのか？ それに俺、三神竹流先生みかみたけるのファンだしさ。三神先生の意識、まだ戻らないの？」

三神竹流は父の筆名だ。ペンネーム 本名は月読竹流。つきよみたける 父は著名的な作家だが2年前に交通事故に遭ったきり、今も意識不明となっている。先日の生徒会委員会を欠席したのは父に付き添っていた母が倒れたと病院より連絡があり慌てて早退したからだ。

幸いめまいがして倒れただけで済んだが、実は母は心の臓があまり丈夫ではない。けど、父が意識不明になった時も大変だったが、発作を起こすというような事は無かった。それが今になって倒れたという事はやはり、父の長期の入院が心臓に負担をかけていたのだろう。母はめまいがしただけで大げさだと呆れていたけれど……お医者さんは心労が原因だろうと言っていたし心配だった。

その為、事情を知った村上先生も大変心配してくれて、病院へ行く為に直ぐに下校できるように放課後の方の図書業務を外してくれたのだ。母の状態もようやく安定した為、今日より放課後の図書業務を再開始めた途端、今回の誘拐騒動が起こってしまった。いや、誘拐じゃ無くて身売り騒動の方が正しいのかな？

「ん、まだ何とも……でも、母はもう大丈夫だよ」

思わす言葉を濁すと、倉木君が慌てて言った。

「あ、ごめん。月読、悪かったな。変なこと言って」

「うっん、いいの。ありがとう、心配かけて、ごめんね」

「謝るのは、俺の方だよ。それじゃ、これ持って行くから、俺が戻る前に村上先生、戻ったら図書の本、全部、完了しましたって言うてくれる？」

「うん、分かった」

倉木君は本の入った段ボール箱をカートに乗せ、図書室から出て行った。その間にも箱の中の化け本達の悲鳴が木霊の様に廊下の方より響く。

「
「
「
「
「
「
「

イヤ——ッ！！！！

「
「
「
「
「
「
「

• • • • •

化け本達の悲鳴を聞きながら、見送った私は思わず考え込んでしまふ。うーん、これはこれで喜んでいいのか悲しんでいいのか分からないのが、なんとも微妙な感じだ。その時、背後より怒気の含んだアズルの声が聞こえた。

「…… やつと行ってくれたか。それにしてもよくも、俺を見捨てたな。お前ら！」

輝夜のホントな話6（前書き）

お詫びとお知らせ

投稿した時点では気に成らなかったのですが、改めて読み直した処、人によっては不愉快に思われる個所があるなと気づきました。不愉快に思われる方は素っ飛ばして下さいね。
（・―・） 幸
月さちこ

輝夜の水ントな話 6

ギクツとして後ろをそつと見る。青玉色サファイアいろの髪を逆立てて腕を組み、まさに怒り心頭の状態だ。怒れる彼を宥めるのも大変そう、ああ、まずい。これどうしようと頭を抱えていると隣にいたディックアの紫水晶色メジストいろの眼が冷ややかにちらつと彼の方に向けられた。

「アズル、君が覗こうと言い出した結果がああいうことになったのだよ。わたし達はあまりにも君達が五月蠅かったから出て行っただけで何も責任は無い。それに、君は信長と光秀にがちり捕まっついて連れ出せなかったしね。君自身も彼らを振り離す力も無かっただろう」

「——くっ…… ふん！」

アズルが悔しそうに横を向いた。実際、その通りなのである。

「それに、君も気付いていると思うが念が薄れているのは、何も彼らだけでは無い。わたしも君もそうだと気付いているか？ 輝夜かくやさんが、ご両親のことで多忙になりわたし達にまで構っている暇が無かった事は知っているね」

「……ああ、前よりも力が出ないという事は認めるよ」

化け本達は持ち主である読み手が、本を読むことによって人形ひとがたになる力を得る。ライトノベルのアズルも漢和辞典のディックも此処暫く、読んでいないのだ。ただ、常に身近に置いているため、念が薄れても姿が薄くなるという事は無いが、それでも、念が弱まっている事には変わらない。彼らは彼らなりに私に負担をかけないよう

に黙っていてくれていたのだろう。

「ごめんね。アズル、読んでやれなくて…… ディも心配かけてごめん」

「いいえ、いいのです。今のわたし達の持ち主はあなたですから、あなたに負担を掛ける様な事はしたくないのです。無理して、わたし達を読まなくてもいいですよ。気持ちが落ち着いてからでもいいのですから…… アズルもちやんと分かっていますよ」

「ありがとう、ディ。もう、落ち着いたから大丈夫だよ。アズル、家に帰ったら読んであげる。それで、機嫌直してね。ね、ねっ？」

アズルに手を合わせて上目使いに可愛く懇願してみる。

「……わかったよ。悪かったな、怒鳴って」

そっぽ向いたまま、アズルはつつけんどんに答えるけど、彼の頬が照れているのか赤くなっている。むふっ、やっぱりアズルは何処か、可愛い処もある。家に着いたら寝る前に読んであげよう！ と、心の中で誓い中断したままの作業に取り掛かる。

下校時間が迫ってきてても、村上先生はまだ戻ってこなかった。

「先生、遅いな。職員室で何かあったのかな？」

先に戻っていた倉木君が帰り支度をしながら呟く。私は図書室に

いた最後の生徒が帰ったのを確認して、戸締りの準備を始める。図書室のカーテンを閉めながら

「倉木君、先、帰っていいよ。私、もうちょっと待ってみるね。先生に報告したい事があるし」

報告したい事もあるけど、本当は鶴さんの本の事が気になるのだ。

「分かった。じゃ、お先に失礼するよ。また、明日な。バイバイ」

「うん、また明日ね。バイバイ」

軽く手を振って、倉木君が図書室から出ていくと姿を消していたディックとアズル、織田が眼の前に現れる。

「村上先生に鶴さんの事、聞いてみたいし戻った織田さんの本も、どうするのも知りたいしね。織田さんも気になるでしょ？」

図書室のカーテンをすべて閉め終え、次は返却された本をカートに乗せ本棚に戻す作業を始めながら、相変わらず無表情なままの織田に声をかける。

「……まあな」

と、冷たく返事はするけど眼が微かに泳いでいるから、本当はものすごく気になっているのだ。何で素直じゃないのだろうかね、あんたは——と呆れながらも作業を進めていく。

返却された本もすべて棚に戻し、もう後はドアに鍵をかけるだけとなった頃にようやく村上先生が戻った。わらわら取り巻いている

女の子達がいなくてホッとする。

「ああ、申し訳ないです。月読^{つきよみ}さん。遅くなつてしまいましたね。生徒達に下校するように注意するのに手間取ってしまったので」

「いえ、大丈夫です。頼まれていたリストもすべて打ち込み終わりましたし、バザーに出品する本も生徒会会議室に運び終えましたよ」

「ああ、その事についてですが、報告するのが遅れましたね。あなたが留守の間に図書の一部の本を処分する事に決まったのですよ。2週間後に迫った文化祭のバザー品にする事が決まりました」

「はい、倉木君より報告受けました。村上先生、1週間の間、図書業務を休ませてくださってありがとうございます」

「いいですよ。お母様はもう、大丈夫ですか？ お父様の事も有りますから随分と気になつてはいたのですよ」

顔立ちは織田とよく似ていながらも、全く正反対の温かみのある茶色の眼が眼鏡の奥からやさしく、氣遣わしげに私を見詰めている。もう、ウツトリしちゃう、この某韓流スター似のやさしい表情。キヤ／＼っていう取り巻きの女の子達の氣持も分かるものだ。

「はいっ！ もう、大丈夫です。ご心配かけてすみません。お氣遣いありがとうございます。ところで村上先生、この本の事について聞きたい事が有るのですが……」

と、後ろ手にした右手をひらひらさせて、織田に本になれと合図を送る。しばらくして右手にズシッと重みが増したのを確認して前に出す。

「この本が返却されたのですが、戻す場所が無くて困っています。如何でしょうか？」

無断借用された揚句に三日三晩呪いに呪って、ようやく戻ったという化け本、いや呪いの本を村上先生に見せる。

見せた途端、先生の穏やかな表情が変わった。突然、体がプルプルと震え顔も赤くなり優しげだった眼鏡の奥の眼が、何故か血走って獲物を狙うように鋭くキラ〜ンと輝きだしたかと思うと、鼻息もフーンとまるで興奮した牛みたいに荒くなってきた。あまりにも極端な村上先生の変わり様に目が点となる私。これって……

「……先生？」

「はっ、はっ、は——っ」と興奮したように荒い息を吐き出して、私を見詰める村上先生の様子に思わずビビってしまう。

——こ、これは、まるで織田の小説に出てくる凶悪性的犯罪者の様な表情している！？ じゃないのっ！！ て、言うか。何これっ！…… ホントにあの、微笑みの貴公子と称される村上先生なのかっ！？ と、疑うほどの豹変を見せた。

ビビりながらも、何故か頭の中ではどっかで読んだことのある場面だなと思う自分もいた。

え〜つとたしか、鶴さんの本の中に出てくる、狡猾な連続レイプ殺人犯の表現と同じ状態だね。たしか、織田警部が犯人の罠にかかり、連続レイプ殺人者の濡れ衣を着せられて逃亡し、鶴さんとヒロ

インで鶴さんの娘さんでもある女性検視官が大活躍して犯人逮捕、
織田の名誉も回復して、おまけに鶴さんの娘さんと織田との間に恋
も芽生えて、めでたしめでたしの内容だったな、鶴さんの化け本は
…… うん。

いや、そうじゃないってば！ 何で今自分、ピンチになっている
のかもって時に、冷静に鶴さんの本の内容を思い出すのだ！ 私！！

（——な、ななっ……！？ 何——っ！？ これっ、お、襲われち
やうの！？ 私！？）

おまけにサスペンスドラマの様に御誂え向きに、誰もいない図書
室で男の先生と二人きりである。思わず身の危険を感じ、織田の本
を手にした右手だけを村上先生に突き出して、後退り「お控えなす
って！」のポーズになってしまった。異変を感じたディックとアズ
ルが前に出て、私を守ろうとした時、先生に襲われた。

……そう、右手が、だ。いや、正確には右手に握っていた織田の
本が、だった。

「——ああっ！ 僕ちゃんの本！！ もう、見つからないと諦めて
た、僕ちゃんの本！！！」

「……………」

手放すタイミングを失った右手ごと織田の本に、抱きつきスリス
リと頬ずりしている。その様子は、もう完全なオタク萌え萌え状態
そのもの。私の中から、村上先生の微笑の貴公子的イメージがガラ
ガラと音を立てて崩れ落ちるのを感じてしまった瞬間でもあった。

しかも、30代の男性が自分のことを“僕ちゃん”だなんて……
なんか詐欺だ。

眼の前の狂態ぶりにしばし呆然となっていたけど、下校時間を知らせるチャイムの音にハッと正氣に戻る。いまだに掴まれていた右手を何とか抜き出し、ディックとアズルの後ろの方に慌てて戻る。二人の間から、そっと見れば村上先生は頬ずりをやめ、本をパラパラとめくり中身を確認するように読んでいた。それを、見ていたアズルがぼそつと呟く。

「……織田の奴、身悶えているぜ」

「ええっ!？」

恍惚とした表情で本を読んでいた村上先生が、次は指先で文字を愛しむように撫でながら読んでいた。再び、アズルが呟く。

「……仰け反っている」

「え——っ!？」

「アズル、もう何も言っな」

ディックが困ったように言う。

「えええ——っ!？」

驚いて二人の顔を見ればアズルは真っ赤になりながらも半眼で呆れたように眼の前の人物を見詰め、ディックは綺麗な眉を顰めて非常に困った顔になっていた。

ディックの綺麗な顔が、こんな表情をするのは初めて見た。しかも、彼は完全に眼の前の人物を無視し、おまけに綺麗な顔を明後日の方に向けている。私には人形に化けていないので、織田の様子が分らないけど同じ化け本である二人には彼らの様子が見えているのだろう。——それも、かなり際どい場面になっているみたい……

二人の様子から、犯人のアリバイ崩しの推理が楽しいハラハラドキドキする織田警部シリーズのミステリー小説の筈が村上先生と織田の間では何故か、官能小説の様になっているのか？ いや、ここはボーイズラブと言った方がいいのか？ 一体、どんな場面が繰り広げているのだ！？ 見てみたいような、見てみたく無い様な……

目眩めく男同士の官能の有らぬ場面を何故かチャツカリと想像してしまいウツとした私は、下校のチャイムが鳴っていた事を思い出し、一先ず退散する事に決めた。

未だに、織田の本に官能的に夢中になっている村上先生に恐る恐る声を掛けてみる。

「……あのう、村上先生。チャイムもなった事だし…… 私、帰りますね」

村上先生が本からやっと顔を離れたかと思えば、ウツトリとした顔で私を始めて見たような目で見て来た。ものすごいエロ顔になっているよ…… 鞆とポーチを胸に抱きしめドアの方へと後退る。

「おや、まだいらしていたのですか。早く、お帰りなさい」

と、言うなり村上先生は再び織田の本に夢中になってしまった。

「――か、帰ります……戸締りお願いします」

もう何も聞こえていないらしい村上先生の背中に、声をかけて図書室を出た。

輝夜のホントな話7（前書き）

今回も人によっては不愉快に思われる個所があります。不愉快に思われる方は素っ飛ばして下さいね。（・|・:）幸月さちこ

輝夜の水ントな話7

図書室のドアを閉め、まだ気になるのでドアの小窓よりそつと覗く。図書室の殆どの照明は落とされ、デスク周りの所だけ明りが付いている。その明りが、まるでスポットライトの様に村上先生のまわりに当たっている。

こちらからは背中しか見えないので、どんな表情で読んでいるのかは知らないが、時折背中が笑っているのかプルプル震えているのが見える。それがまた、不気味だ。

一緒に覗き込んでいたアズルが、またまたボソリ。

「……ん、織田の奴。今度はよがつ—— いでっ!」

「ヨガ?」

アズルが言うエロい行動? から織田さんは、次は何故かヨガをしているのか? と、不思議に思い途中で悲鳴に変わったアズルを見れば、ディックに耳を引っ張られている。

「アズル、いい加減にしなさい」

「なんだよ。せっかく面白いもんが、見られるっていうのに—— いでっ、耳引っ張るな!」

「君の行為は出歯亀と言うのです。出歯亀するのも大概にしなさい」

「輝夜^{かぐや}だって、出歯亀しているだろ! いだっ!」

「輝夜さんには、本を読んでいる村上先生の後ろ姿しか見えていません」

出歯亀のことで言い争っている。でも、どうして覗き見のことを出歯亀って言うのだろう？ よく小説の表現として使われているけど……

「ねえねえ、何で覗き見の事、出歯亀って言うの？」

アズルの両耳を引っ張って、説教していたディックが「おや？ 知らなかったのですか？」と私を見て来た。

「うん。よく、小説の表現として出ているし、お父さんの小説にもあった。どういう意味って聞いてみたら、知らなくてもいいって言われたけど……」

中学生の頃の話だ。お父さんの小説は新作が出るたびに読んでいた。その新作に出ていた単語だった。これどういう意味？ って、聞いた途端、顔色を青ざめて

「わ——っ！？」 輝夜は読まなくていい！」って、私から本を取り上げていた。なんで？ と疑問を感じ、あとでこっそりと読んでみて理由が分かった。父の作品にしては珍しく生々しい性的描写が含まれていたのだった。ちよつと、ショックを受けたのを覚えている。

今じゃ、携帯でこっそり恋愛小説やらハーレクインを読むから、もうそんなに驚かなくなっただけ……

それでもやっぱり、意味はきちんと知りたい。知らないまままでい

るのは自分の性格からして嫌なのだ。そう、ディックに訴えるに
っこり笑って

「分かりました。わたしがお父様に代わって、ご説明しましょう。
そもそも、『出歯亀』とは現在では一般に窃視^{のぞき}行為やその常習者の
ことを指しますが、その由来は明治の終わりに起こった強姦殺人事
件の犯人とされた、池田亀太郎さんが『出歯の亀吉』と呼ばれてい
たために当時の新聞などで『出歯亀事件』として、センセーショナ
ルに報道されたことで『出歯亀』と言う言葉が生まれたそうです」

「……ご、強姦殺人の犯人？」

聞いていたアズル共々、衝撃的な事実に関顔が青ざめる。

「ええ、銭湯帰りの女性が殺されてね。よくその銭湯の女湯を
覗いたり、銭湯帰りの女性の後を追いかけたりと、痴漢行為をして
いた亀太郎さんが容疑者として逮捕されたのです。ただし、決定的
な証拠は出なかったそうですから、冤罪説もあったようです。た
またま、怪しいと言うだけで逮捕されたとも言われています。この
事件から亀太郎さんの様に窃視^{のぞき}趣味と窃視^{のぞき}行動のことを『出歯亀』
と言うようになったのですよ。その後、逮捕された亀太郎さんがど
うなったかと言いますと――」

「……もう、いいよ。そこまでで……」

「……お前、笑顔で延々と説明しなくても……」

まだまだ、続きそうなディックの説明を二人して止める。

「おや、残念ですね。この後がまた面白いのに」

と、艶然な微笑を浮かべる。時と場所と話している内容が違っていたらウツトリするほどの極上の微笑みだけど、今は別の意味で寒気がする。

「腹黒辞典の悪魔の微笑みだ……」

「アズル、何か言いましたか？」

「……いいや、何でも無い。それより、もう行こうぜ。早く帰って、俺を読んでほしいし……」

「そうですね。もう、暗くなりましたし。輝夜さん、この後、病院へ行かれるのでしょうか？」

「うん。今からだと、ちょうどバスの時間にピッタリ間に合うしね」

村上先生に鶴さんの事を聞きそびれたけど、あの様子じゃ無理だし、織田が先生の手元に渡ったから織田の方で鶴さんに出会えるだろう。

明日、また改めて聞いてみれば良い事だし、化け本の事も明日にしよう。あ、でも次は化け本達のバザー出品の値段、決めるかもしれないなあ？ そうなったら、今度は私に、お局様から「呪ってくれるわ！」とでも言われそう。頭痛くなっちゃうな。あと、もうすでに、明日の事を何だかんだと色々思い巡らして昇降口へ向かう。

上履きと靴を履き替えて、外に出る。辺りはすっかり暗くなっていた。正門までの道を電灯が照らしている。母に今から病院へ向かうと連絡するため、携帯の電源を入れた。

電源を入れた途端、“プルルル……”と、着信音が鳴る。周りが静かなので余計けたたましく聞こえた。

「わっ！　びつくりした、誰からだろう？　あれ、晴ちゃんかはるんだ」

晴ちゃんは、私の幼馴染で家が隣同士なので家族共々、親しくさせてもらっている。ただ、晴ちゃんの家族は、いわゆる普通一般の家族とは大きく懸け離れている。非常に変わった家族、いや、なんて言えはいいのかな？　特殊な一族と言った方がいいのかも知れない。

「晴ちゃん、どう——　ぎゃっ!？」

『遅いつ！　今まで何していた——っ！！　下校時間はとくに過ぎているだろ——！！！！』

携帯を耳にあてた途端に、どなり声が鼓膜にキ——ンと突き刺さる。思わず携帯を耳から外す。外しても晴ちゃんのどなり声が携帯の受話口から聞こえる。

「晴ちゃん、うるさいっ！　怒鳴らなくてもいいじゃない！！　鼓膜が破れるっ！！！！」

いきなり怒鳴られて、カチンとした。こっちも、負けじつと携帯の送話口に向かって怒鳴り返す。

『なかなか、来ないから、心配するだろう！！　閉門時間ギリギリまで何していた！！！！』

「図書業務が長引いただけ！ それに晴ちゃん、何でそこにいるのよ？」

自分の携帯をはずして、正門の前で携帯を耳に当てて、こちらを睨んでいる青年に声をかける。

輝夜のホントな話7（後書き）

第1章 輝夜のホントな話 終わりです。次からは第2章、始まります。

輝夜とトナリの陰陽師1（前書き）

第2章、始まります。

輝夜とトナリの陰陽師 1

私が晴ちゃんと呼んだ、背の高い青年の名前を安倍晴明あへはるあきと言う。
『アベノセイメイ』では無い。『アベハルアキ』と呼ぶのが正しいのだ。

私とは、家が隣同士の幼馴染でもある。彼もまた、私と同様に名前ですら苦労している。

私は月読輝夜つきよみかくやという華美でメルヘンチックな名前に、晴ちゃんはあまりにも有名すぎる名前に……

晴ちゃんこと晴明の名前は、平安時代の有名な陰陽師と同姓同名の読み違いなのだが、子孫でも何でも無い。晴明には、式神を操れる不思議な力なんか、全く無い。ただ、陰陽道についてはと言うとこれがまた、ビミョーなのだ。晴明の家系を見れば、何だけど……

それでも、かの陰陽師とは全く、何の関係も無い事だけは確かである。

偶然とはいえ、何故、晴明がこのような名前になってしまったのかは、安倍家に代々伝わる家憲かけん。つまり晴明の実家である安倍家のある掟が、原因で名付けられたそうだ。

聞けば実にくだらない掟だなあと、私は思うのだけど……いくら由緒ある名門『安倍財閥』で在るといえどもだ。

晴明の実家は『財閥』と、冠せられる日本でも有数の大金持ちの

名家である。

そんな、安倍家の掟のせいで、読み違いとはいえ、かの有名な陰陽師とは同姓同名のためか、随分と苦労しているみたい。

いくら、本人が関係無いと盛大に不定しても、『アベノセイメイ』の子孫！？ と、いまだによく誤解されているのは日常茶飯な事。また、他の人からは名前の呼び方も、『ハルアキ』では無く、『セイメイ』と呼ばれたりしている。

その、原因は清明の容姿に大いに関係あるのだけど、本人は気付いていない。

とあれ、自分の名前に大いに不満を持っている清明の、正門の電灯の明りに照らされた特徴のある顔が、いかにも不機嫌度Maxな状態で私を睨んでいる。

そんな、彼の態度にこつちも、ムツとする。「おるああ！ 何も、携帯で怒鳴らなくてもいいじゃ無いってえのよっ！！」と、お局様風に巻き舌で怒鳴り付けたい。

「今日、ゼミ仲間と教授との飲み会があるから、遅くなるので先に病院へ行けって、言っていたじゃない！ 何も怒鳴ること、無いじゃない！！」

「うるさい。下校時間過ぎても、なかなか来ないお前が悪い。ともかく、予定が変わったんだよ。だから、迎えに来た」

眼の前の青年、清明が自分の携帯をポケットにしまいながら、ぶっきらぼうに答える。

いかにもこつちが悪いって言っているような、彼の態度にますますムカついてくる。ぶーっとむくれて更に文句を言おうと口を開きかけた、私の横をアズルがすつと通ったと思ったら晴明に「親父くっ！！」と、叫んで飛びつきギュツと抱きついてきた。

「ぐげっ！」と、変な呻き声が晴明の口から聞こえる。

「……アズル…… 親父って叫んで、いきなり抱きつくなんて、いつも言っているだろうが！」

アズルにムギュツと抱きつかれて、女の子のように綺麗な晴明の顔が引きつっている。それを見た途端、私の胸のムカつきがちよっとは治まった。いい気味だわ。ふん！

そう、晴明が何度も不定しても「セイメイ」と、呼ばれる原因はその顔にある。小説や、漫画のなかだけの「安倍清明」あへのせいめいのように超絶系の美貌の持ち主なのである。

実在した平安時代の陰陽師「安倍清明」あへのせいめいは、本人らしいという肖像画を見るかぎり、イケメンだとはとても言えないけれど、「違うのは読みかただけね」っていう現在に生きる彼はそうなのだ。

化け本の漢和辞典、ディックと張り合える超絶系の美形だ。同じ化け本のアズルもそうだが、実に人間離れた綺麗な顔立ちをしている。ここまで来ると、「晴ちゃん、あんたマジ人間？ 本当は化け本じゃ？」って、言いたくなる。

そして晴明は、私以外に化け本が見える唯一の人間でもある。それには、ちゃんとした理由がある。今、ここでは言わないけれど……

またアズルにとっては、彼は生みの親である。晴明は海賊王子アズルを世に送り出した人気ライトノベル作家であり、私より三つ年上の二十歳の現役の大学生なのだ。

晴明のラノベ作家デビューのきっかけは、著名的な作家である私の父に憧れた彼が、中学3年の頃に書いた、海賊王子アズルが活躍する処女作を父に見せた事からはじまる。

晴明の文学の才能に気付いた父が大手出版社のラノベ小説の新人賞募集に応募する事を勧めた。晴明も運試しとして応募してみれば、これが、あれよあれよという間に最終選考まで残り、しまいには審査員全員、満点の大絶賛で見事大賞に輝いた。

こうして、中3ながら見事ラノベ作家デビューを果たした彼は中学を首席で卒業後、そのままエスカレーター式に高等部に進学し現役の高校生で在りながら、在学中に人気ラノベ作家として世に『海賊王子アズル』シリーズはもちろん、その他学園ものやら、いろんなジャンルのラノベを次から次へ世に送り出す。これがみんなベストセラーになるのだから、恐れ入る。

人気ラノベ作家と高校生という二足の草鞋を見事にはきこなして、またまた首席で高等部を卒業、またまたエスカレーター式にそのまま、大学へ進学。現在、いくつもの人気ラノベを連載しながらも、大学では首席で通している。

本当に顔の出来といい頭の出来といい、こんな人間いますか？
冗談でしょ！？　と思ってしまう。

「で、何で予定が変わったの？」

ガシツとしがみ付かれているのを何とか振り払おうとアズルの体ごと、プラーンブラーンと必死で身を振りまわしている姿が面白い。アズルの姿が見えない他人から見れば、「何、この人？」と引かれる事、間違いなしだ。

「ええい！ アズル、もういい加減に離れろ！！」

ようやくアズルの熱愛的なスキンシップから解放された晴明が、不機嫌度Max状態でも、綺麗だわ〜って言う顔をこちらに向ける。

「謀られたの！ 逃げて来たんだよ」

「……ゼミ仲間内の楽しい、楽しい飲み会のはずが、実は合コンでした！ だったの……？」

「……その通りだよ」

「その通りって…… そうなるかもって分かりそうなもんじゃない？ 晴ちゃんの場合」

「うるさい。今回は五十嵐教授も一緒だから、油断したの」

五十嵐教授は晴明のゼミ担当の教授で、熊さんみたいなゴツイ体格の面白い人だ。お父さんの大先輩で友人でもある。時々、スイーツを携えて、お見舞いに来てくださる甘党の方なのだけど、たしか体格に似合わず、お酒はからつきしダメな下戸のはず……

「五十嵐教授が、飲みに行こうと誘ったの？」

「そう、ゼミ仲間内の親睦を深めるためにも、ぜひ参加しろと言われて渋々、承知したの。絶対に他の女を入れない事を条件にしてな初めはよかったんだが、無理やり引きずられて連れて行かれた2次会に女どもが待ち受けていた。まんまと謀られたよ」

清明は、その眉目秀丽ともいえる容姿のせいで小さい頃から、女性に異常なほどモテていた。時には、えげつないほどのアプローチがあつたりして、今ではかなりの女嫌いとなっている。

二十歳の今日まで、ガールフレンドはおろか恋人が出来たという話は、未だに聞いた事が無い。

その清明が秀丽な眉宇を顰めて、電灯の明かりを背後に受けて佇む姿が、また神々しくもあつて美しい。

365日×17年間と今日まで幼馴染として付き合い、もう十分見あきた顔のはずなのにそれでも時々、綺麗だわと思ってしまう。

「……綺麗すぎるのも、罪づくりだね」

「お前が、言うな!」

「だって、本当の事だもん。おかげで、どんだけとばかり受けて迷惑した事が……」

私に友達が出来ないのも、清明のせいである。私が彼の幼馴染と知って、清明目当てに寄ってくるのである。もつとも、その子たちは後で、清明から手酷く撃退されるので、今では誰も私に近づこうとする人はいない。

「で、どうなったの。どうやって脱出したの？」

その時の事を思い出したのか、「はぁっ」と溜息をつきうんざりした顔で頭をガシガシ掻きだす。その度に綺麗な黒髪が電灯の明かりを受けて。キラキラと輝く。私よりもキューティクル度、超上級じゃないの！？ 相変わらず、腹立つわぁー と思ったとしても顔には出さない。

出したって無駄なのだ、この人の場合は…… 比べちゃっても敵わないし、その度にこっちの方が落ち込んでしまっし、時間の無駄になるし、ともかく無視するべし！ と、心の中で気合を入れ、晴明の話の続きに集中する。

「教授を問い詰めたら、告白したよ。なんでも、日本で1ヶ所だけしか買えない有名パティシエの絶品限定ロールケーキを女どもから賄賂として受け取ってしまったとね。しかも、それ食べながら告白しやがるし……」

「へーえ、よく調べたね。五十嵐教授が下戸の甘党だということ。教授、隠していたでしょ？」

「……ああ、もうあれで、カミングアウトしていたな。ともかく、お詫びに逃がしてやると言っていたけど、その前にトイレに行くとか何とか言って出て行ってしまった」

「出て行ったって、逃げたの？ 教授!？」

「俺もそう思った。けど、暫くして俺の携帯が鳴って出たら、教授からだった。女どもに鞆を預けてそのまま、手ぶらで電話が聞き取りにくい振りして外に出ると言ってきた」

「鞆、犠牲にして逃げろって言うてきたの？ でも、晴ちゃんの鞆、小説の原文が入ったパソコンがいつも、入っているんじゃない……」

「ああ、俺もどうしようかと思ったが、いつも持ち歩いているUSBメモリーにバックアップしているし、パソコンはパスワードが懸かっているから大丈夫だ。ひとつでも間違えればクラッシュするようにプログラムしている。ともかく、後で教授が届けてくれるだろうと思い、言うとおりにしたよ。女どもから逃げることを優先した。鞆があるから女どもも油断してあっさり承知したし、無事、出られた。けど、見張りを付けられてしまった」

「へえ、晴ちゃんのハートを射止めようとする、お姉さま方も必死だね」

晴明の後ろにいるアズルが、うんうんと頷いている。

「……だから、お前が言うな……」

苦り切った表情でも絵になってしまふ。と、思う自分がいる。もう、充分だわ。晴明の顔についてはもう、無視しよう。それより、続きが気になる。

「で、で、どうなったの？」

すっかり、脱出劇に夢中になって、晴明に詰め寄る。私の顔が近づきすぎたのか、晴明がウツと呻いて顔を背ける。ん、その態度、何？ 感じ悪っ！ どうせ、私の顔はあんたと違って背けちゃうほど平々凡々な顔ですよ。ああ、また何かムカついてきた。

「でえ？」

自分でも棘が生えまくっているって分かる不機嫌な声が、自分から出ちゃった事に驚く。でも、何であんたまで驚くのだ。

「輝夜？ 何、怒っているんだ？ どうかしたのか？」

不思議そうに、私の顔を覗き込む。あんた先程、私から顔近づけたら背けたでしょ！

「……晴ちゃん、さっき、私が顔近づけたら呻いて、背けたわね。感じ悪っ！」

プンスカ怒って、詰れば晴明はきょんととして、その後、プツと吹き出していた。ますます、感じ悪いってえのっ！

「もういい！ 続きなんて聞かない！！ もう、帰る！！！」

私はまだ、正門の外に出ていなかった。晴明が学校の敷地内にいたからである。晴明を無視して外に出ようとすると、腕を引っ張られてバランスを失ってよろめく。よろめきながらも何するのよと振り返ろうとしたら、晴明に後ろから抱きしめられていた。

「まだ、外に出ちゃダメだよ、輝夜。あいつらがいる」

頭の上から、耳に心地よい低めのやさしい美声がする。晴明の温もりが背中に広がる。心の中で、なんでこういう格好になっちゃってんのかと思う自分がいた。それに、あいつらって…… 何？

「——ちょ、晴ちゃん！ 離し——」

最後まで言い切らないうちに、後ろの方から遠慮がちな声がしてきた。

輝夜とトナリの陰陽師1（後書き）

拙い小説をここまでお読みくださって、ありがとうございます。
また、来年もよろしくお願いします。
幸月さちこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0616x/>

私と本となりの物語

2011年12月28日20時58分発行